

Newsletter

August 2020

<http://www.aack.info>

目次

ノシヤック初登頂から 60 年	笹谷哲也さん追悼文寄稿のお願い
回想 ノシヤック初登頂 酒井敏明1	原田道雄23
ポーランドの山仲間たちに幸いあれ	第 52 回雲南懇話会のお知らせ
岩坪五郎15	山岸久雄23
高所登山と幻覚 松林公蔵18	2020 年度総会報告と 2021 年度総会の予定について
図書紹介	事務局長 永田龍24
『ヒマラヤ縦走―「鉄の時代」のヒマラヤ登山』	会員動向24
鹿野勝彦著 田中二郎20	編集後記24
鈴鹿山系で昨年 10 月遭難	
平田和男さんの追悼集完成	
榊原雅晴22	

ノシヤック初登頂から 60 年

回想 ノシヤック初登頂

酒井敏明

I. パミール地域学術調査隊

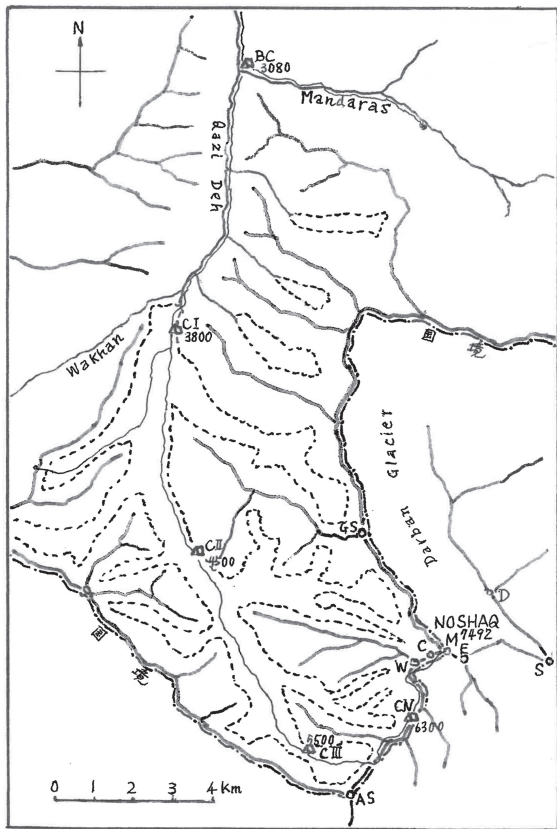
1. 山日記

私が京大の学生として山登りにいそしんでいたころ、日本山岳会が年に 1 回編集発行する山日記と称する小型の本があった。現在私の手元にある 10 冊ほどの中で一番古い版は 1955 年版である。私が 3 回生の春を迎えるころ駿々堂あたりで買ったものであろうか。サイズは縦 140mm、横 100mm、文庫本とほぼ同一だ。第 1 ページにあるまえがきに編集者松丸秀夫氏は「山に持って行って書く日記だが、信頼できる調査記事と興味ある山の物語を出来るだけ沢山のせることに努めている」と書いている。

実際に使った経験がある方または実見した人には無用の事項であるが、ここには具体的に説明するのが適当と思う。この年刊行の『山日記』1955 (20 輯) 茗溪堂は総 397 ページあり、内容はほぼ四つの部分からなる。まず、自由記入

用の白が約 90 ページ、次いで、積雪期登山・遭難対策・装備・気象など 10 項目に分かれる基礎編 80 ページ、三つ目は山の歌・世界の山々・登山行程表・概念図など 9 項目の文化ないし教養編が 97 ページ、最後は山小屋一覧・登山団体一覧・日本山岳会沿革と現況など、7 項目 112 ページからなる。

表紙 2 つつまり表紙を開いたその裏側には 1955 年七曜表が載せてあり、その対面に札幌、長野など 5 都市における日出入時刻、その裏ページに東京中央標準時の月出入時刻表があり、扉 1 枚、モノクローム写真 2 葉、まえがき 1 ページ、目次 2 ページが続く。このあとに自由記入ページがはじまるという体裁だ。表紙 3 には首都圏から富士、丹沢山域へ延びる路線を持つ私鉄会社の全面広告があり、その前 13 ページを費やして 1 ページ大、または半ページサイズの、広告 22 件が掲載されている。奥



地図1 ノシャックとカジデー渓谷。本図はポーランド隊発表図を参照して作ったものである。山の記号:M, E, C, WはMain, East, Center, Westの略、DはDarban Zom、SはShingeik、ASはAsp-e-Safed、GSはGumbaz-e-Safed。

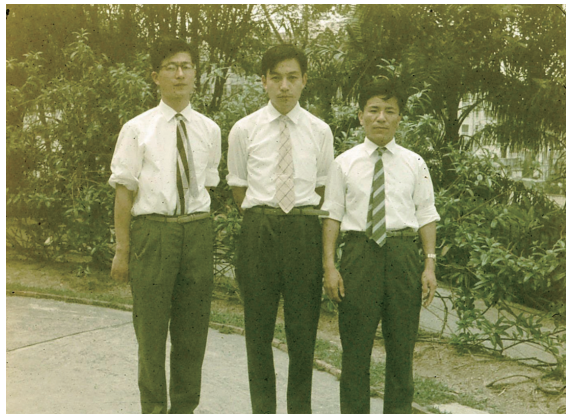


写真1 左から 岩坪 廣瀬 酒井

10字が18mm、つまり1字は横1.8mm、縦はこれよりやや長い。この版には書下ろし原稿が多いそうであるが、地形と地図の小林国夫氏、気象の久米庸孝氏など、当時の高名な執筆陣に依頼した力作が揃っている。

日本山岳会編『山日記』にもどると、第21輯(1956年)、第24輯、第25輯、第26輯、第27輯(1963年)の各輯には私自身OBになってからも現役部員の山行に加わっていっしょに山に登ったことが何度もあり、自由記載ページには山行計画や参加人員の名簿、岩場や谷の略図などいろいろ書き入れてあるのだが、次に「世界の山々」について述べる。

付に昭和30年1月1日発行、定価250円との記載。

仮に基礎編と名付けた第2部のトップにおかれた松方三郎さん執筆の「登山の注意」はさすがの松方さんと思わせる、読みやすく深い内容をもつ立派な文章であるが、これが1行41字、1ページ40行のびっしり詰まった組み方で4ページの分量ある。最後のあたりで若い登山者たちに語りかけるように注意事項を述べて、一種の風格を漂わせている。

他に一例だけを挙げるとすれば「登山の医学」について伊藤洋平先輩が書いていらっしゃるのを発見した。厳冬期知床半島遠征を実現させた実力者ヨッペイさんのものがたりはザッカス、ダンナ、ワイ、ポコなど先輩諸兄からたびたび聞かされていたから、嬉しく思ったものだ。それにしても文庫本1ページに横書きで1,600字ほど組むのだから、活字は極小というべきか、

2. ノシャックの発見

AACKが1958年チョゴリザに初登頂したのは日本隊としてはナンダコット、マナスルに続く第3番目の快挙であり、カラコルムにおいては日本隊初名乗りの名誉に輝くものである。次の目標をチョゴリザの南東約35kmにあるサルトロ・カンリに定めたのだが、まもなくこの山はインドの実質的支配地域に近いが故に許可取得が容易で無いことが判明した。若手の会員たちは、確実に許可が得られそうな山を探し出す必要に迫られ、1959年の年明け早々から私たちはルームに集まっては話し合ううちに、発見したのがノシャックであった。

『山日記』1955年版に田中栄蔵・望月達夫両氏の編集になる「世界の山々」の表がある。「高度4500m以上のものから著名なもの(7500m未満の峰は極めて著名なものに限る)」として、120の山名が掲げられている。未踏峰であるこ

とを示す X 印が 8000m 級に 8 峰、7000m 級に 25 峰あった。これらの山々の中には許可が得られそうでその上私たちでも充分力を試せるだろうと思われるという条件にかなう対象は一つも無かった。

次の年の『山日記』1956 年版では吉沢一郎さん編集の「世界の山々」に変わり、北米、南米、アフリカ、南極などから合計 176 山をリストしている。山名、高度、所属山脈、初登頂年が記載され、○印は完登の山、X 印は攻撃された山、と注記があるので、登攀が試みられたこと無しと判断できた山は無印とされたのであろう。7000m 以上、8000m 未満では 94 峰がリストされ、そのうち 29 峰は無印であった。このグループに「ノシャック 7490m H.K」があることに私たちは気づいたのである。

第 2 次大戦後に入国できるようになったネパール領内のヒマラヤはイギリスのヴェテラン H. Tilman 以来 10 年近い探検史があり、カラコルムはそれこそ先駆者たちが半世紀以上にわたって探検登山を繰り返した地域なので、未踏の 7000m クラスにはどんな山があるかわれわれでも見当がついたのであるが、ヒンドウクシュはマークの埒外にあったのであろうか。ノルウェー隊が 1949 年にティリチ・ミールを偵察、試登し、翌年見事に初登頂したこと、1958 年にチョゴリザ隊が現地では出会ったフォ

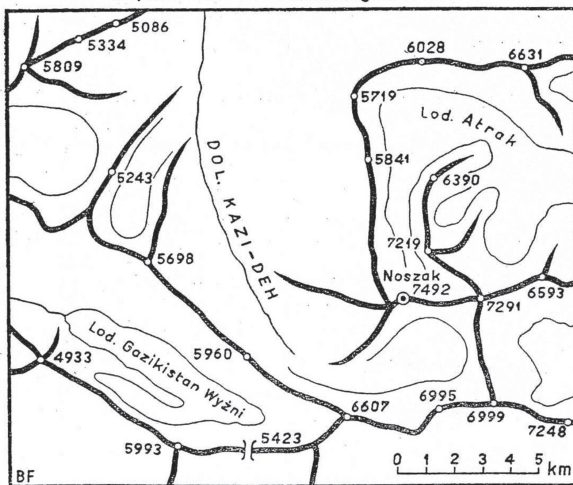


地図 2 カラチからカーブル経由ノシャックへのコース図

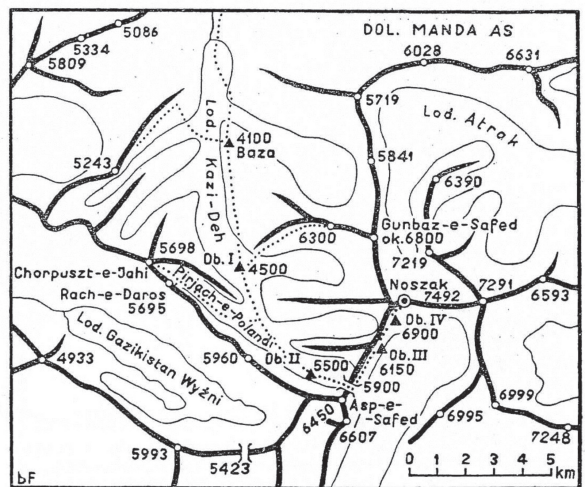
スコ・マラーニ二さんが翌年つまり我々が急遽山探しに懸命になっているときにサラグラール登山隊を指揮してヒンドウクシュに向かう計画があると耳にしていたのに、そのヒンドウクシュ山脈におあつらえ向きの高さの未登峰であろうとは、まさに思いもかけないことであった。

1930 年代にインド測量局が作成したクオー

Mapki Bolesława Chwaścińskiego z Tatarnika 2-4/1962.



Dolina Kazi Deh i Noshak
Myślny przebieg grani według mapy 37 P/SE i P/NE, 1:126 720
Survey of India z r. 1931 — opracował Bolesław Chwaściński



Dolina Kazi Deh i Noshak
Rzeczywisty przebieg grani na podstawie szkicu Stanisława Biela z r. 1960 i mapy 37 P/SE i P/NE, 1:126 720 Survey of India z r. 1931 — opracował Bolesław Chwaściński

地図 3 国境稜線はノシャックからほぼ南南西へのびているのに 1930 年代の地図 (左) では誤って約 4km 東に描かれている。



写真2 カジデー氷河上 4500m の C II の眼前に聳える前衛峰 主峰頂上は左手頂稜上に頭をのぞかせている

ターインチ地図（約 25.3 万分の 1 縮尺）Zebak 図幅の青焼きコピーが手に入り、ティリチ・ミールの北方、主分水嶺尾根が複雑な曲折をくりかえしながら西から東へ連なりそびえ、北のアフガニスタン南のパキスタンの国境線が引かれた一角に、Noshaq 24,573 フィートと記されているのを見出すことができた。ノルウェー隊はティリチ・ミールを南側から攻撃したので、北方 20km に東西方向に長い頂上稜線をもつノシャックを自らの目で眺めることができた隊員はわずか数人に過ぎなかったはずで、その分厚い報告書にはノシャックへの言及はほとんどなく、写真 1 枚載せるわけでもない。一方、サラグラールとノシャックの間には 2 本の山脈が介在し、距離も 27km 余あるので、イタリア人隊員たちはノシャックの姿を子細に見ることなど不可能であったろう。ノシャックはヒンドゥークシュ山脈第 2 の高峰で、アフガニスタン国最高峰であるが、今までこの山に接近を試みた者はなく、登路を検討するための資料は皆無といっても過言ではない。

文学研究科の大学院生であった私は、学部の書庫をかなり入念に探したのであるが、関連する情報を与えてくれた本はただ 1 冊だけ。デンマーク軍人で 19 世紀末年にパミール地域の西縁と南縁を限るパンジ河（アマダリア河の最上流）渓谷の探検調査をしたオルフセンの英文報告書『未知のパミールを横断して』に大意を以下に示す記述があるのを見つけた。

Pandsh 渓谷からチトラールに通ずる Ishtragh 峠は接近が容易で無い。ワハーン人に

よるとこの峠は冬季通行不可能、夏でも万年雪地帯にまで登らなくてはならず、雪や氷よりも氷河を覆う岩屑の堆積の方が危険である。・・・この峠の西方にヒンドゥークシュ山脈の最高峰群が 2 つの巨大山塊に分かれて並びそびえる。Nushau と呼ばれる 7460m の北の巨峰と 7463m の高さを持つ南の巨峰 Tirach-mir だ。・・・Nuksan 氷河の直ぐ西に Nuksan 峠 5064m があって、万年雪限界線より高いところを行くので通行は極めて困難だが、土地の者たちは夏の大部分の時期峠を越すことができるという。・・・

かれはパンジ河の北岸および東岸を歩いたのであり、南岸に渡ることを切望したのに許されなかったのも、ここに引いた記述は実地に調べたものではなくて伝聞で知ったものと考えてののだが、それにしては真実に近いところを含み、きわめて貴重である。考古学者オーレル・スタインはチトラール側からヒンドゥークシュ山脈を越えてパミールに入ることを三度、多くの谷を歩き峠を越えて長期にわたる調査をおこなっている。数巻におよぶ大部の調査報告書を世に問うているが、高峰そのものの記載は当然のことながら少ない。ヒマラヤの大ヴェテランイギリス登山家ティルマンは 1947 年に中国新疆からインドへ帰る途中ワフジル峠から無許可でワハーン渓谷に入り、最後は身柄を拘束されて上記の二つの峠より西寄りに位置するドラール峠からチトラール管区に送り返される状況になったので、国境近くの山々の情報を知ることなど全くの不可能事であった。

3. パミール学術調査隊の成立

当初は隊長吉井良三の案でスタートしたパミール計画は資金集めに難渋して氣勢が上がらなかったのだが、AACK 創設会員の一人、府立茶業研究所長が定年になり静岡大学農学部教授におさまっておられた酒戸弥二郎さん（54 歳）が隊長に就任することが決まり、俄然計画は実現化の方向へ動き出した。副隊長は教養部助教授吉井先生（46 歳）、若手メンバーとして住友化学社員廣瀬幸治（30 歳）、文学研究科院生酒井敏明（28 歳）と農学研究科院生岩坪五郎（26 歳）が選任された。京大理学部地質鉱物学科出身、通産省（当時）地質調査所技官を務めていた澤田秀穂さん（43 歳）はアフガニスタンで地質調査に従事した経験者で、土地の

言葉もできる人材であることが分かり、山岳部との接点はなかったけれども隊員として参加することが決まった。科学者3人、登山3人からなる京都大学パミール地域学術調査隊（略称KUPE1960）が成立したのである。

パミール遠征計画趣意書（1960年3月）には、「京都大学学士山岳会は本年の夏、科学上の処女地というべきワハン渓谷一帯の生物学、地質学等の学術調査をおこない、また、処女峰ノシャックの偵察をもおこない・・・」とある。

8000m以上のジャイアンツ14座が相次いで初登頂された時代であったが、高度が7500mに近く、登路の検討どころか、登山の可否を判断する資料となる写真一枚も存在しないノシャックのような山はあまり類例が多くあるとは考えられない。我々はまず対象に接近できるか否かも明言できないこの山では、偵察隊として登攀可能なルートを探ることが第一義で、それ以上のことは現地に着いてからの判断にゆだねることと、結構のんきにかまえていた。

1955年京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊（KUSE1955）に加わったAACK会員の先輩たちが近辺に幾人もいらっしやっし、会員でなくても気楽に相談にのってくださる方も少なく無かった。アフガニスタンは日本との縁がうすく、最新の情報など簡単には入手できなかったの、準備に当たってはKUSEでアフガニスタンに入った方々の経験をお聞きすることが貴重な助言をいただくことになったのである。

アフガニスタンは乾燥が厳しい内陸国であり、北東隅パミール地域の南東角に発するヒンドークシュ山脈が東北東から西南西へながながと延びて、日本の1.7倍の面積があるこの国を南の高原部と北の低地帯に分けている。

道路はあるが鉄道は全くない。隊が現地が必要とする登山用・旅行用装備・機器類、写真機材、食糧などほとんどの必要物資は日本から船積みしてカラチ港に荷揚げする。ここからパキスタンを縦断、スレイマン山脈をカイバル峠で越え、首都カーブルまで、さらにバダフシャン州ワハン渓谷の玄関口イシュカシムまで運搬するためには、自前のトラックを用意するのが必須のことであった。隊長はトヨタへ行行って募金を依頼したがカネは出せないというので、それなら車を欲しいとねだるとタダでは困るとの



写真3 前衛峰から南へ延びる国境稜線上に最終キャンプCⅣを作った

返事。仕方なしに車1台を10万円で買うことになった。

これはウェポンキャリアと呼ばれる自衛隊向けの一輪駆動小型トラックで、市販品ではないがわれわれの用途に適合するすぐれものであった。左ハンドル、運転席の横にどうやら二人座れ、後ろの荷台には幌が付く。車長5.85m、車幅2.17m、車高2.32m、車重2800kgのデータがある。クリアランスの数值は不詳だが床はかなり高く、未舗装の悪路でもへこたれない。105馬力、最高時速85km、積載量1000kgである。排気量は不明だが2000～2500CCはあると思われた。実際、隊の荷物約800kgを積んでカラチ・イシュカシム間約3000kmを走破してくれたのである。往復の全行程、7100kmであった。

Ⅱ. アプローチ

4. マイトラックでカーブルへ

5月上旬若手3人は神戸から飯野海運若島丸に乗船、1ヶ月弱の船旅を終え、空路カラチに先着した酒戸、吉井両先生と合流した。シニア2人が空路カーブルに先行した後、車と荷物の



写真4 本峰頂上めざし自分の影を見ながら頂稜上を歩む酒井

通関をすまして、カラチを出発するのである。カラチからカイバル峠までは日本大使館のお世話で雇ったパキスタン人ナビー運転手がハンドルをにぎり、助手席に廣瀬が座る。岩坪と私は若干の手回り品とともに別にハイアしたフィアットのジープに乗った。2台は炎熱のタール沙漠、続いて緑のパンジャブ平原を疾駆して、古都ペシャワールに着く。

一人カーブルに先着したドクトルサンギ（ペルシア語系サンギは岩のこと、だから澤田さんの愛称）にアフガン国境まで迎えに来てもらう連絡をしてあった。ナビーは隣国に入ることが許可されなかったもので、ついにエト（廣瀬）さんが運転せざるを得なくなった。卒業後化学会社に勤務していたエトさんは自分で小型自動車を所有、運転していた。現地で適切な運転手を雇えない場合には自分が運転を引き受けるこの話はできていた。当時マイカーという語はまだなかった。私はバイクには乗っていたけど4輪車の免許はなく、岩坪も免許以前であった。国境ゲート手前でナビーと別れ、エト運転手の仕事始めとなった。かれの愛車は今でいえば1000ccクラスのカロラ、それが作りが頑丈で大きく荷物満載の小型軍用トラック、それも左ハンドル車で生まれて初めての右側通行。助手席に座るゴロー（岩坪）と私は対向車が現れるたびに運転手が迷わず右へ避けてくれるかどうかははらしどおしだ。幸い通行車両は少なく、右側通行にも慣れ、次第にエト先輩が頼もしくみえ、いつの間にか不安は消えてしまった。

6月15日、ドクトルがチャーターしたジープに案内されて、午後7時首都カーブル市中心

部にあるオテル・ド・カーブルに到着した。酒井、吉井のお二人に合流、初めての全員集結である。

5. ワハーン渓谷の玄関口

当時のカーブル市は平和で、炎熱の砂漠国パキスタンからそれも陸路入国した私たちには程よい気温が嬉しい高原都市であった。大使館の皆さんは仲内憲治大使を筆頭に私たちの隊を快く迎え、現地当局との折衝にも支援するのを惜しまれなかったのであるが、バダフシャン、とりわけワハーン渓谷地域への旅行計画は許可がなかなか下りないで、想定以上の足止めを食らってしまったのである。

しかし本稿においては委細を述べることは省略して、先へ急がなければならない。

アフガニスタンは武勇を誇り独立心に富む王国で、19世紀以降に英軍の侵攻を3度も受け、最後は英軍を駆逐して独立を守った。民族構成は極めて多様で多くの言語が使われているが、現パキスタン国境近くに勢力を持つパシュトゥン族が支配層を独占する状況にあった。北東部を占めるバダフシャン州にはタジク民族が多いという。東京で大使館を訪問したときにはワハーン通廊地域も入城を歓迎するような対応であったが、旅行計画をめぐる首都での折衝は長引き、例のトヨタ車と空路クドゥーズ行き国内航空便でカーブルを出発できたのは、最先発到着後ひと月近く経った後である。当地でも大使館のお世話でもろもろの準備をすすめたのだが、運転手を見つけることはできず結局エトさんの腕に頼らざるを得なかった。我が隊の世話をする役のリエゾンオフィサーに任せられたムズタル氏は文部省のかなり上役の官吏らしい。この人物は初めの数日間それなりの仕事をしたけれども、この間に体験した悪路の旅が体にこたえたらしく、州都ファイザバード市に着いたとたん離任の許しを懇願するありさま。普通には考えられない事態で、説得しても態度は変わらず、やむを得ず帰すことになった。連絡官無し、通訳無しでワハーンに入ったのである。不便この上なし。もっとも、ファイザバードおよびイシュカシムからは士官一人、従卒10人ほどの護衛プラス監視の軍人さんが同行して、私たちに写真撮影禁止を強制し続けたのである。

当時この国の、他の州は知らずバダフシャン

州の辺境地では道路は舗装がないのが常態で、小川には橋がかかっていない。我がトヨタ車はたびたび渡渉を強いられたが、エトさんの奮闘によって多くの場合切り抜けることができた。また、道路はあっても車の台数自体が絶対的に不足していて、自家用トラックに席をもたない隊員3～4人はハイアする車が見つからないときには馬を探さなければならない。連絡官はこうした時こそ出番なのに、早々と職場を放棄して客人を置き去りにしたのだ。この国の後進性を表すものの一つであろう。

私たちはワハーン渓谷への入域を許可されたといっても、その範囲はノシャック山塊から発して北流する1支流が本流ピャンジ河に注ぐ合流点までであった。イシュカシムから20km足らずのこの合流点にある村カジデーからカジデー谷に沿って南へ登る山道が始まる。

東方はるか先の中国国境から西へ流れてきたアムダリア源流はこのあたりではピャンジ河とよばれる。ピャンジ河はイシュカシムでほぼ90度折れて北へ流れ下る。対岸は当時ソ連邦のタジク社会主義共和国領のパミールであって、幅100m～200mの河原に濁水を流すピャンジ河の中ほどに国境線が設定されている。ワハーン渓谷は古来シルクロードの重要な幹線であったとされ、ワハーン通廊の異称をもち、19世紀末に英領インドとロシア帝国の緩衝地帯として細長いワハーンがアフガン領に帰属すると決まった経緯がある。外国人が入域するのを厳しく規制する理由であろう。

道路はピャンジ河の南北兩岸ともにできているが、アフガン側は整備状況が悪く、トヨタ車はイシュカシムからさきの通行は許されず、馬とラバなどの馱載家畜を使わなければならない。

7月17日、馬とラバ20頭余りに荷物を積み、谷沿いの踏み跡があるかなきかの頼りない道に畜群をすすめること8時間、左岸から合する支流マンダラーズ川の水勢がはげしく、渡渉が不可能だったので、この地にベースキャンプを作ることに決した。高度は3080m。本流ピャンジ河水面より600mぐらい高い。ヤナギの疎林のなかの小平地をならして数張りのテントを張ることができた。



写真5 最高地点に立つ岩坪

Ⅲ. 偵察隊は登山隊に変身した

6. 未知のカジデー氷河

我々が入手しえた唯一の地図、クウォーターインチ Zebak 図によれば、Kaji Deh カジデー川はほぼ真南に向かって上流へ遡ってゆくとヒンドウクシュ主分水嶺山脈（国境線が引かれている）に近づくにつれて谷は左へ（東へ）向きを変えていき、主分水嶺自体が90度近く左へ（北へ）曲折して延びるその稜線上のコル状部分に突きあげていると読むことができた。ノシャックの頂上はそのコルから北へ延びる主分水嶺上にあり、分水嶺が最高点を過ぎてなおしばらく北に延びたのち再び右（東）へ大きく曲がると描かれている。谷壁は高く大きく、谷底近くの下部斜面にはまばらな植生があって上方を見ることはできない。本谷を登ってゆけば頂上はいずれ姿を現してくれるものと考えられた。

ワハーン渓谷の村々は小さく、耕地は広くないので、人口も少なく飼養する家畜も多くはない。護衛と監視役の兵士たちも近くに幕営する様子で、荷揚げの家畜についていっしょにベースまで上がってきた村人たちの一部も私たちのキャンプの近くに寝泊まりするらしい。荷物を運ぶポーターとして数人の村民を雇うことができた。

カジデー谷をBCから数キロ登ってゆくとや



写真6 下山時パキスタン領にそびえるティリチ・ミールとイストル・オ・ナール（左）を見る

がて黒い岩屑に表面をすっぽりと覆われた氷河の末端が見えてくる。その少し手前に右手（左岸）から一大支流（地図に Wakhan 谷と記載）がカジデー谷に合流する。のちに分かったのだが、この支流ワハーン谷を遡ると源流域には樹枝状に分かれる数本の小氷河群からなる盆地があり、主分水嶺すなわち国境稜線上にある5600mほどの2つの峠のいずれかを越えてチト랄管区に入ることができるらしい。インド測量局地図はこのカジデー谷からワハーン谷に続く谷がかつて住民たちが通行に利用した山道であるとみなし、点線路記号をここに付けたのだと考えられる。

初めの数日間若手3人組はカジデー氷河末端部ツング（氷舌）の右岸側から氷河上面に上がり、主に黒スレート（粘板岩）の岩屑で覆われた右岸端に近いモレインの丘に登路を求め、偵察を続けた。小石に埋められた河原に二次的に下刻によってできた水路を泥水が流れるカジデー川谷底からカジデー氷河最下流部上面の堆石丘にC I（3800m）をつくり、氷河本体が次第に左へ曲がり、ざっと200mはあった幅員が100mほどに狭くなり、前面にノシャック本峰から落ちて来る幅広の尾根を見上げる約4500m地点にC IIを作った。小起伏が多い氷河表面はこのあたりまで黒スレートの堆石がほぼ全面を被覆しているが、小さな水たまりが幾つもできていて良い水が使える場所がある。C IIはのちに前進根拠地としてフルに活用した。初めのうち一緒に行動していたエトさんは風邪をこじらせたのか不調が長く続き、C IIから上では動ける人間は岩坪と私の二人だけになっていた。

C IIから先はようやく氷雪の世界に変わり、行動にはピッケルとアイゼンを必要とした。幅狭く傾斜も増したカジデー氷河を登っていき、いくつも開口する小クレヴァスを避けて高度をかせいでいくうち、3面を氷の斜面に取り囲まれた椀の底のようなクームに着いた。300m上方にカジデー氷河最上端が国境稜線の鞍部に接続する様子が見えた。この偵察行ではその鞍部まで登りきる時間はなかったが、このクームをC IIIのサイトにすることは可能と判断した。一度BCに下りることにした。

やる気があって、BC以上にとどまっていた村人たちはアルバーブ（村長）のもとに10人足らずが常時いたようで、荷揚げには数人が協力してくれた。護衛プラス監視役といっても写真を撮らせないように見張ることが最大の任務と見えたアスカル（兵士）たちは指揮をとるナビー大尉以下10人ほどいて、軍帽制服姿だが武器は何も携行しない丸腰の姿で私たちのテント地に一人か二人いた。エトさんには回復したらC IIまで上がってほしいと言ってC Iで別れたきり一度も会わなかったのだが、かれは一人になってからも熱が下がらず、C Iでほとんどの時間寝ていたという。ブアイソの愛称をもらっていたアスカルは炊事を助けるなど病人のためになることは何一つできなかったという。病人さんに孤独で不便なテント暮らしを強いていたことに思いが及ばずにいたことをお詫びし、あすは何とか歩けそうだというので、次の日一緒にBCまで下りてもらうことになる。

7月27日、ベースで、5人が報告・現状分析の話し合いをした。写真が撮れないのでは偵察隊の使命も果たせないし、ともかくイシュカシムまで出向いて政府当局者に撮影許可を交渉するため、ペルシア語を話せるドクトルサンギを特派することになり、数日前からC I付近の地質調査を続けているドクトル宛の手紙をポーターに届けてもらう。次の日下りてきたドクトルはぜひ隊長に行っていただかないと埒があきませんといい、これに隊長も同意されて、アルバーブに翌日馬2頭用意させることになった。

隊長とドクトルが帰ってくるまでには数日かかるだろう。その間にBC目前にある支流マンドラズ川溪谷の上流域を一目見ておきたかったので7月31日岩坪と日帰り偵察行に出

た。村人ダウラチョーとアスカルのマリーザが付いてきた。土地の猟師たちが通るのであるうか細い踏み跡道が断続的についていて、谷沿いに岩場が現れて対岸への渡渉を強いられたりしながら、どんどん登る。途中で岩坪は頭痛を訴えて一足先にBCへ戻る。ゴルジュ状に狭まった谷の奥に氷雪を冠る6000m級の峰を仰ぎ見る地点に到着した。一番高い山の名を聞くと、ダウラチョーはマンダラーズと答えた。地図で21,723フィート(6621m)とする山であろうか。北面はけわしい岩と氷の壁になっているのが分かる。遅くなると水が増えて帰れなくなると心配するので、やむなく撤退に決めた。高度4200mぐらいまで登ったかなと思う。渡渉地点では増水が渦巻き流れてとても渡渉どころではない。右岸とおしに滑りやすい草付き斜面やガラガラに崩れた岩場にかすかに残る踏み跡を探しながら下り、出発後8時間にして帰幕した。

もう一つは左岸に注ぐ最大支流ワハン谷をのぞいて源流部の氷河盆地の姿を一度見ておきたいと考えたもので、当初は出合からワハン谷を遡る案であったが、途中で変更し、左岸でワハン谷より一つ上流の急勾配で流下して合する支流氷河を登り、いまだに姿を現さないノジャック頂上をこの目に収めたいというものであった。吉井さんと私、初めの日には午後3時にC Iに着いた。小憩後ワハン川合流点まで下って、ワハン谷上流域を眺める。谷は右へ曲がっていて上流部の見通しはきかないけれどもワハン氷河は数本の支氷河に分かれているようだ。

8月4日C I発、急勾配で幅狭く、上からの落石が少ないためほとんどモレインの被覆がないこの無名氷河を登り、最後は鞍部に到達して反対側を見下ろしたとき初めて分かったこと、そこに展開したのはワハン氷河集水域の手のひらを広げたような盆地状の開けた土地であって、分水嶺南側のパキスタン領の山々ではなかった。背後には予想した通りノジャック頂上の姿をとらえることができたが、それはC IIの前に聳える前衛峰の左側に、頂上稜線以下と同じ黒い岩ではなく薄褐色をおびた岩からなるこぶ状隆起であった。初め同行していたアクラムがその時近くにいなかったので吉井さんはしめしめとオリンパスで頂上付近をカメラにおさめた。



写真7 C IIは前進根拠地になった

翌5日午後3時ごろBC帰着、驚いたことにそこには雲つく大男の外国人が6人もいたのだ。なかには大きな箱型カメラを構えて、制止しようとするアスカルたちを突き飛ばしながら我々二人を撮る者までいる。ポーランド遠征隊が突如出現したのであった。

やがて騎馬で帰ってきた隊長とドクトルの話しでは、8月2日イシュカシムに隊員12人と荷物4トンを積んだトラックが到着したのだ。ポーランド人登山者たちで、目標はノジャックであるという。そんなことがあるわけではない。ケーブルで政府当局者と折衝を重ねていた時にも、そんな話は全く聞いたことはない。先方の隊長フワシンスキさんも、イシュカシムに着いたら日本人が2人もいて、自分たちの仲間はずでに登山を始めているのだと聞かされてびっくり仰天したのである。

7. ポーランドの登山者たち

お互いに競争者が存在することは事前に知らされなかった。たまたま日本隊が現地に着き、ポーランド隊は舞台への登場が20日遅くなっただけのことである。驚いた隊長ヤジさんは、自分たちが現在ここにいる理由を述べると、相手方はその状況を理解したと言い、優先権は日本側にあることを認めた。日本側は彼らが出現した事実は無視する立場にはないので、仲良く協力して合同登山をすることが可能かどうか協議することを提案した。

ポーランド隊は最初カジデー谷の東にあるWarg谷およびその東隣のKeshuni-khan谷を遡り、詰めの稜線や鞍部に登ってそこから頂上

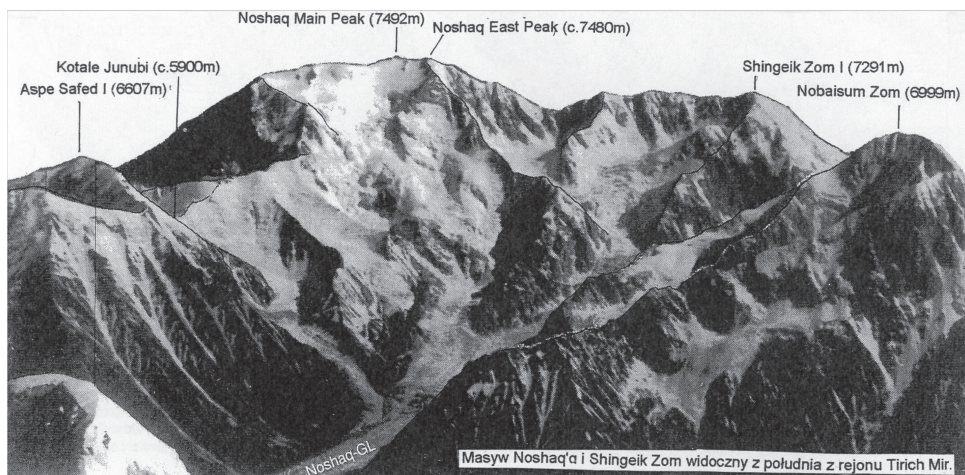


写真8 ティリチ・ミールからノシャック山塊を望む。最右端手前はノバイズム・ゾム

へ向かうルートがあるか調べた結果、やはり登路はカジデー谷に探るべきであると考え、私たちの後を追って登って来たのである。14日ワシンスキ隊長は我がCⅡを訪れ、日本側との最終協議に臨んだ。酒戸隊長、澤田の二人とはすでに話し合いが済んでいるとし、吉井、広瀬、岩坪、私たちとの会合になったのである。

のちに分かったことだが彼は大战前に土木関係？技師としてアフガニスタン国にしばらく滞在した経験を持ち、仕事の合間に氷雪に輝くヒンドゥークシュの山並を眺めては、ここで登山することを夢見たという。ポーランドには標高2499mを最高峰とし20以上の2000m峰があるTatra山脈があり、冬季は結構厳しい氷雪に覆われる山岳があるが氷河は存在せず、故国で物足りなく思う登山者たちはアルプスやソ連領カフカス山地で腕を磨くらしい。戦前アンデスに一度、インドのガルワルヒマラヤに一度ポーランド登山隊が遠征した歴史があるが、戦後に開国したネパールヒマラヤとカラコルムは費用がかかりすぎて手が出ない。ポーランド山岳会にヒンドゥークシュ登山計画を提案したのがこの人で、それが採用されて隊長に指名された。アルプスやカフカスの困難な登攀で名を挙げた登山者を全国からえりすぐって編成した登山隊を率いて、勇躍この地にやってきたのであった。

この協議の日までに、わが方はカジデー氷河を最上端まで登り、その先には地図が暗示するような氷河の奥の院は存在せず、パキスタン領のティリチ・ミール、イストル・オ・ナルな

どの山々を間近に見ることができた。肝心なめのノシャック頂上は左折する分水嶺尾根をそのまま北へ登ってゆき前衛峰を右へ迂回した頂上稜線の先で我々を待っているのですと説明した。CⅣ予定地の少し手前だが荷物の半分ほどはすでに運んである。ポーランド側が望むならば合同登頂隊を作っていっしょに登るために出発を2、3日遅らせる用意はある。ただ、動けるものが2人しかいないし、好天が長く続くことは期待できないので、いつまでも待つことができないことは理解してほしい。

これに対して、隊長は好意を謝し、自分たちも最善を尽くして努力しているが隊員たち(My boys)はまだ高度順応が十分できていない。せめて1週間でも遅らせてもらえれば合同登頂は夢ではないのだが、そこまで待てない事情はわかる。残念ではあるがどうか先に挑戦してくれという。隊長は他の隊員たちよりおそらく10歳以上年上の、人格者で、会談は友好裡に終えることになった。

登山の最終局面はかいつまんで述べよう。

8. 登頂 そして帰路に露營

8月15日、吉井さんとエトさんに見送られて二人はCⅢに上がる。氷河最上段のクーム状凹地に張っておいた我がテントの傍にはポーランド隊のテント2張りがあり、隊員が3、4人いた。彼らに明日出発すると伝えると、事情はすでに了解しているらしく、スイス製上等の高度計1つを貸してくれ、さらに小型軽量のブ

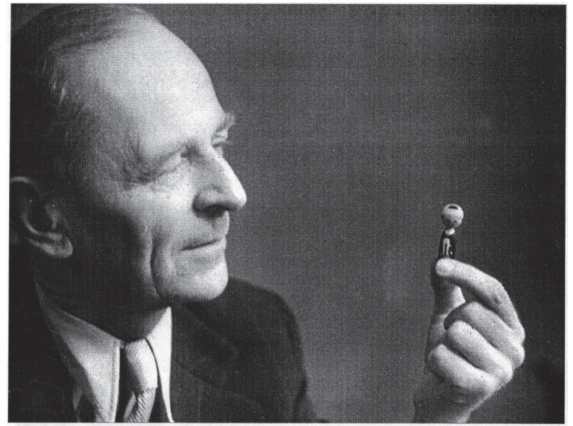
タンバーナーを1セット使ってくれと持ってきてくれる。また詰めの手帳とそこから稜線を左へ登ったところに自分たちはテントなど資材を揚げてデポしてあるから、必要なら何でも使ってもらってかまわないなどという。

16日朝は友好的なポーランド人たちに送られてCⅢを発ち、テントなど装備をデポジットしておいたCⅣサイトには昼前に着いた。ポーランド隊が折角貸してくれた上等高度計なのだが、なぜかあまり手帳に記録を残していない。最初6800mあたりまで登ったかと思ったこの予定地はどうも6500m前後にとどまるようだ。すぐに整地をし、クジラ型と称する、入り口には半円形の籐製フレームがあるのに天井が低く床は先細りのテントを張る。居住性が極端に悪い。チョゴリザ遠征で使用されたセコハンもの、もとのヴァーミリオン色が褪せて赤黒くなっている。小さくて軽いのが取り柄で最高所キャンプに選んだのだが、これは明らかに失敗だった。借り物のタンバーナーを教えられたとおりに組み立て、コッヒェルの鍋をかけて雪を融かす。

このキャンプの先、雪の稜線の左側は下の支流氷河まですっぱりと切れ落ち、右のアップーティリッチ氷河の支流ノシャック氷河側は上部雪面にむかって雪庇が張り出していたのが、先は狭い雪稜となり、眼前に上下2段の岩峰がそびえる。第1岩峰の基部まではこの日の午後のうちにトレースしておく心算だったのに、昼食後、低くてせまいテントの中で転寝している間にこの作業に出かける気持ちを失ってしまった。

17日5時半にテントを出る。無風快晴、絶好の登頂日和に恵まれた。20mザイルで結びあい、狭い雪の稜線を登りだした。アイゼンのツアックが堅雪に食い込む感触を楽しむ。約1時間で基部に着き、第1岩峰の見た目より容易な岩場を登り、直登できない個所では右の雪面に避ける。第2岩峰手前の平場に8時半に着いた。ビヴァーク用のツェルトザックと羽毛服、若干の食糧をデポすることにした。

次の第2岩峰ははるかに大きく、岩はおおまかで傾斜は前よりけわしい。ハーケンを打たずに済ましたがお互いに確保して一人ずつ登る。交代にトップに立っていた岩坪が左へ大きくトラヴァースして狭くて急な雪面に出た。快調に



Bolesław Chwaściński w r. 1960 – z lalczką pozostawioną przez zespół japoński na szczycie Noszaka

写真9 ポーランド隊は頂上からこけし人形を持ち帰った。後年それを見るフワシンスキ氏

アイゼンをきかせて登りきると碎石と氷とからなる緩斜面にかわり、これをたどることしばしで前衛峰から落ちる雪稜に合する。あと高距200mほどを残すこの頂上は敬遠して右へ捲き、ノシャック氷河最上部の雪面を斜上に登り東へ延びる頂稜にとりつけばよい。

1本の大クレヴァスが開いているのは左端を捲いて突破し、雪が堅くて歩きやすくなった岩屑帯を登り、前方400mに薄褐色の岩屑が積み重なったような最高点が見えた。頂上到着は午後6時丁度であった。

この日一日、歩き続け、しんどくなったら足を止め、また歩き出しては足を止めを繰り返し登高を続けた。腰を下ろして休んだり何かを口に入れたりして時間をロスした覚えはほとんどないのに、えらく時間がかかってしまったものだ。手早くオウヴァズボンのポケットから日の丸、AACKの旗を取り出しピッケルにくくりつけた。登頂記念の写真を代り合って撮る。同じくポケットから小さなこけし人形2つを取り出して、最高点傍の岩屑の陰に置いて風に飛ばされないよう岩の小片で押さえ、雪で覆っておく。私たちの姿を照らす太陽はすでに真横かそれより低い方向から弱い光を送ってくる状況で、明るいうちに少しでも低所まで下るためには一刻の余裕もなかった。一日中背後にあったティリチ・ミール山塊は、相変わらず南の空にわだかまり、イストル・オ・ナールの長い西南稜は見下ろす方向に延びている。頂上の北側斜

面がはるか下方のダルバン氷河まですぽんと切れ落ちているのに一瞥を与えて下りの一歩を踏み出そうとしたとき、「煙草を吸いましょ」と岩坪が言った。そうだ、むやみに焦燥感にかられるよりも、暮れなずむヒンドゥークシュの山々を眺めながらの一服も悪くはないと思って、二人してピースに火をつける。うまくない。しかも恐ろしく寒い。半分も吸わないうちにやめる。滞在20分にして頂上を後にした。

岩屑の丘を駆け下る。小氷河の真ん中に着いた頃には、それまで日没後の薄明にかすかにたどり得ていた雪面上のトレースを見失った。ジャンクションまでは何とか帰り着きたい、見当をつけて急ぐ。左へ迂回して登ってきた大クレヴァスを避けるため、意識的に右寄りを心がけて下るうち、真っ暗になった。小さなヒドゥンクレヴァスを幾つか踏み抜くうちに、後ろからヘッドライトで照らしてくれていた岩坪がクレヴァスの中でビヴァークしようと声をかけてきた。その瞬間、私は胴まで落ち込んでしまった。這い上がって改めてライトをあてて子細に見ると、絶好の泊り場になることが分かった。

ピッケルで小さな横穴を作る。ザックをおろしザイルを解き、アイゼンを脱いで窮屈な雪穴に二人並んで座る。羽毛の上着、ツェルト、バーナー、乾パンなど食糧を、早々と第2岩峰下にデポしてしまったことを悔やんだが、後の祭りだ。キャンディをしゃぶり煙草を吸うほかにすることは何も無かった。寒い夜だった。長い夜だった。ザイルを束ねて敷いた上に尻を乗せているのに、まるで氷の上に直に座っている感じだ。

あくる18日、明るくなると同時に雪穴を飛び出す。ありがたい、今日も快晴無風。しかしやたらに寒い。ゆうべ暗闇の中を降りてきた方角に誤りはなく、数分にしてジャンクション、つまり南稜から右ヘトラヴァースを開始した地点だ。置いてあった荷物をザックに入れ、ただちに岩稜を下りだす。2時間半足らずで第2岩峰直下の雪のザッテルに着く。デポしてあった袋から乾パンを取り出して齧り、空腹を満たす。もはや不要となったアイスハーケン、補助ザイルなどはここに残し、デポのツェルトザックや羽毛ジャケットをザックに詰め込む。歩き出した。CIV帰着は11時、途中だいぶ足がふらつき、なんでもない雪面でスリップすること数度、氷

片が波状に爪を立てたペニテントスノウが一番の邪魔であった。

天井が低いクジラテントに体を横たえると再び起き上がって荷物を作り、靴を履いて外へ踏み出す気力がなくなったので、たっぶり時間はあったけれどもここに泊まることに決めた。岩坪が自慢の焼きリンゴと称するものを作った。紅茶やジュースなど液体を盛んに作って飲んだ。ずきずきと頭が痛み、鎮痛剤をのむ。CIIでは隊長をはじめみんなが成否を案じて心配している。早く登頂を報告し喜んでもらおうと思うのだが、この調子では動くことができない。

夕食を作っている途中でブタンガスが消えてしまった。一昨日CIIでこれを借りたとき、カセットが4個あった。10時間持つと聞いたので2個借りたのだ。一つが10時間と思って2個で充分ですと言ったのが間違いで、4個で10時間を意味したことがようやく分かったのである。

19日、クジラテントと若干の食糧は放棄することに決め、10時下山開始。コルの手前で登ってきたポーランド隊員2人に会い、「登れましたか」の問い、「ありがとう、おととい登りました」と答える。わがことのように喜んでくれるのでこちらも嬉しくなる。コルでは見納めとなるティリチ・ミールとイストル・オ・ナールの頂上にクリノメーターを向け、それぞれS10度E、S80度Eの数値を得た。CIIIの横に張られたかれらのCIIから3人が近寄ってきて、「成功しましたか?」、「おかげさまで、おととい登頂しました」、「コングラチュレーション!」の問答が繰り返される。ハムがたくさん浮かんだポタージュスープなどのごちそうになる。テントを整理してさらに下る。

氷河の勾配がゆるくなりわれわれがアイゼン着脱場所と決めていた地点まで着くと、エトさんが待っていた。登ったぞ、とこちらから声をかける。いつまで待っても帰ってこんから引き上げようとしていたんやと言われ、「どうもすみません。上でポーランド隊のごちそう攻めにあっておそくなったんや」と謝る。登頂の様子を話し、落っこちたクレヴァスで寒い夜を過ごしてねという。「なんや、エルゾーグみたいなことをやったんやな」と称賛の言葉をかけてくれて、嬉しくなった。

CIIに近づくと日が陰って薄暗くなったモレ

インの上を赤い羽毛服の人物がやってきた。吉井副隊長は「おめでとう、良かったね。」キャンプに着くと隊長とドクトルが待ち構えていた。「隊長、頂上に登ってきました。」「よかったな、なによりだ。よかった、よかった。」

ここで隊長のいたずらに気が付いた。傍に立っているドクトルが小型マイクを隠し持って、にこにこしながら我々の声を録音しているのだ。それには気が付かなかったふりをして、隊長と握手しながら、登頂の時の様子を報告する。岩坪もいつものゴロウ節で、尻の冷たさに泣いたビヴァークのことなど一気にしゃべっていた。

やっと肩の荷が下りたような気がした。ここまで帰ってきたら心配することは何も無い。このあと三人用テントに6人全員が集まって、楽しい談笑の時間が流れていった。偵察隊、変じて登頂者になってしまった喜びをかみしめていた。

9. 山を終えて首都へ帰還

8月20日、撤収作業を始めた。登頂成功をカーブルの仲内大使に打電するためメールランナーをイシュカシムに急派する。岩坪と2人でCⅢを撤収した。ここには、シュールマーマッド、ウスタバダン、マリーザの3人が荷揚げしてくれ、次の日シュールマーマッドが一人で荷揚げに上がってきた。ほかにCⅡ以上で行動したのは岩坪と私2人だけ、これは寂しい話だ。

残る全員が前進根拠地を片付け、ポーランド隊ベースを訪ねて別れの挨拶、24日にはBCをたたみ、呼び寄せた駄載家畜群に荷物を積んでパンジ河本谷まで下り、カジデー村はずれに宿営した。車の準備とガソリン手配その他の用務があって吉井、広瀬、岩坪は順次イシュカシムに先行、残る3人も29日にイシュカシムに移動した。7月14日当地に到着したときにはトヨタ車荷台にははみ出すほどの資材を積んでいて、他に乗用車1台分の手回り品と6人の人間がいた。1ヶ月半過ぎて、装備・器具・燃料、備品類など消耗品は無くなったし食糧もほとんど残っていないので、数人が荷台の空所に乗る余裕ができた。往路ではファイザバードから軍関係者が同乗したが帰路は日本人だけで旅することが可能になった。注文してあったガソリンがやっと着いて、9月3日ワハーン渓谷

に別れを告げてイシュカシムを出発、路傍に1泊、翌日バハラックに帰着した。

ワハーン奥地へ入ることが許可されず、唯一の楽しみになったのがバダフシャン山地の高原の奥、水面高度3110mのシワ湖への往復1週間の旅であった。低地河谷の村々から馬、牛、羊の大群を夏の数ヶ月間放牧する牧畜民たちが夏小屋を営んで滞在する、広大な高原草地である。私たちが訪れた9月半ばは最後まで残っていた牧民家族が家財道具一切を馬背に積んで下山するのに出会うのがやっとという時期であった。

クンドゥーズからアリアナアフガン航空国内便でカーブルへむかうシニア組と別れ、ジュニア組3人はトヨタ車でバーミアーンを訪れ、客が僅かで快適なホテルに1泊した。岩壁に刻み込まれた2体の大仏像は痛ましくも顔面が半ばそぎ落とされた無残なお姿であったが、お顔の周りの壁面に描かれた凶像がうっすらと見えて、参観した値打ちがあったと思う。二日遅れてカーブルホテルに全員集結。

イシュカシムから大使館に打った電文は文字化け？して意味が全く分からなかったそうで、隊長以下が首都に帰着した一昨日はじめて京都へ報告することができたのだと聞いた。私の手許にある「処女峰ノシャックを征服す」と酒戸隊長記「登頂のいきさつ」が載った『朝日新聞』記事コピーは10月5日付けと記されている。登頂の日から1か月半おくれてやっと故国では初登頂を知ったことになる。

9月20日、全員で文部大臣、続いて仲内憲治大使にお会いし、報告する。21日大使公邸の招宴に出席、23日には文部次官主宰レセプションがあり、隊長が報告講演をした。これで公式行事はすべて終了した。

IV. 付録

10. 帰国のコースはいろいろ

9月25日隊長と副隊長は空路カーブルを出発、カラチ経由で帰国の途に就く。澤田さんは残務を片付けるため10日ほど残るといふ。たいへんご苦労なのだがエトさんはカラチまでのトヨタ車を運転する大役を引き受けるので、岩坪と私は陸送屋の名誉ある助手として陸路の旅である。

9月27日、ジュニア3人はカーブルを出発

した。右ハンドルの国パキスタンに入って、ラ
ワルピンディで岩坪が下車した。マリー丘陵で
林学の研究材料を集めるためである。二人に
なったジュニアはインダス文明のハラッパ遺跡
が幹線道路近くにあるのでこれを参観しただけ
で、わき目もふらず炎熱のタール砂漠を南下す
る旅を続け、10月2日午前中に無事カラチに
到着した。大使館を訪れたが日曜日で館員はど
なたも不在で、パレスホテルで旅の疲れをいや
すことになった。

若手3人の帰路について最小限触れておく。
トヨタ車と残った隊荷を日本に送り返す仕事
のめどをつける必要があった。大使館スタッフ
のご支援を受け、まず船会社の代理店で日本
向け貨物船の予定を調べる。好都合な船が
あれば旅客及び荷物の運送をお願いすること
になる。廣瀬は勤務先の会社が航空券を
用意してくれて、7日カラチ空港発、
ダッカ経由羽田行きで空路先発した。
一人残った私は京都の留守本部と
連絡しながら便船を探すのだが、
いろいろ当たらすえに、10月半ば
出航の大阪商船大阪丸に乗船すると
決まる。大阪丸はいったんペルシ
ア湾に向かって航行していくつか
の港に荷物を降ろしてから、
カラチには寄港しないでボンベ
イに寄り、横浜に向かうという
スケジュールであった。とんだ
迂回航路なのだが、その間に
カラチ発日本向け便船は無い
のでこれが唯一の選択であ
った。岩坪にはボンベイに
飛んでそこから乗船する
よう手紙を書く。

11. ポーランド隊は初登頂の数を稼いだ

フワンススキ隊長が Alpine Journal 誌に
発表した記録を基にして、二、三の事項を
ここに記しておきたい。

隊長はおもに各国のパミール登山報告を
参照してノシャックに挑む最適時期を研
究し、出発日を割り出したという。諸般
の事情で少し遅れた。彼らは隣国ソ連
邦内を鉄道に乗って東行して南下した。
アマダリア河中流の河港都市、ウズ
ベキスタン国のテルメズからフェリー
で対岸のアフガン領河港に上陸した。
マザーリシェリフ市でトラックを1台
雇ってイシュカシムに着いた。日本側
は国境地帯を理由として写真撮影を禁
ぜられていたので隊長とドクトルが現
地当局者と交渉しているとき、日・ポ
両隊が初めて相まみえた次第は先に述
べたとおりである。

当地の交通事情が悪く我が隊と同様
かれらも人と物資の移動に苦勞して、
イシュカシム到着が想定よりだいぶ遅
くなったという。可能性としては、立
場が逆転することは充分あり得たこ
ともかもしれない。

日本隊の優先権を認めざるを得ず、
目標の初登頂達成の機会を失ったポー
ランド隊は、多数隊員による第2登
を狙うとともに、なるべく多くの初
登頂を勝ち取ることに戦術を変えた
のである。最終キャンプを我がC IV
より300m以上高い地点まであげ、
8月27日そこから7人が頂上に達
した。岩屑の下に私が置いた小さな
こけし人形を見つけてその1体を持
ち帰ったのだが、これは偶然のこと
ながら、両隊が間違いなく頂上に
到達したことを証明する結果とな
った。カジデー氷河源頭の峠(5900
m)の南に聳える雪のドーム状のピー
ク(6450m)に初登頂してこれに
Asp-e-Safed 白い馬と命名、C II
とC IIIの南側の国境稜線上の5698
mと5685mの2峰にも登頂した。
さらにノシャックの北に位置する
秀麗な雪峰(6800m)を「白い陵墓
」と呼んで登攀を試みたが、悪天候
のためにこれは失敗した。

12. 登山隊はノシャックに殺到した

日・ポ両登山隊がノシャックに登
頂したことは各国の、とりわけヨー
ロッパ諸国の登山者たちに大きな
刺激を与えることになった。ノシャ
ック周辺およびワハーン渓谷南側
のヒンドークシュ山脈には6000m
以上の未踏峰が数多くあり、7000
mを超える山も見つかる可能性が
あるらしいこと、ヨーロッパから
陸路を使えば費用が安くあがるこ
とが知られた。一種の遠征隊ブー
ムがおこり、対象の位置によっては
許可取得がなかなか容易ではな
かったが、1978年にソ連軍が
アフガニスタンに侵攻してのち政
変が相次ぎ、国内争乱が頻発した
ために1980年以降外国人のワハ
ーン入域は事実上不可能になって
しまう。それまでの約20年間は
ヒンドークシュ登山の黄金時代だ
ったといえるかもしれない。

ノシャックに限定して述べる。第
一次ポーランド隊のメンバーだ
った Biel と Dr. Zierhoffer が
1962年それぞれ登山隊を率
いてカジデー谷に入り、あらか
じめ目を付けておいた Koh-i-
Nadir Shah6814m、Koh-i-
Mandaras6631m な

ど数峰に初登頂したのが端緒となり、63年にはオーストリア隊が我がC II近くにBCを設け、眼前の西峰西尾根に登路を開き、キャンプ2つを経て西峰7250m、東峰7480mに初登頂するとともに新ルートから主峰7492mの第3登をなしとげた。これを契機に迂回して国境稜線（南尾根）から登った1960年の初登ルートではなく、PilzとGruberが63年に開拓した西尾根がこのあとノシャックの通常ルートと目されるようになった。1970年に西尾根からノシャック主峰の第9登をしたオーストリア隊員は頂上からカジデー氷河までスキー滑走で下りた。1973年2月中旬に登頂したポーランド人A. ZawadaとT. Piotrowskiはアジアの高峰を厳冬期に登頂した最初の登山者であり、その後ヒマラヤやカラコルムにおいてジャイアンツの厳冬期登山がさかんにおこなわれるようになった。1971年にパキスタン領チト랄管区からアップパーティリチ氷河に入りその北支流ノシャック氷河側から国境線の南尾根にとりついて主峰登頂に成功したのは、Stefan、Nave、Egerのオーストリア登山者であって、アフガン領域以外から登頂した最初の成功例である。同じ年松商学園短大登山隊が北のダルバン氷河に入り本峰北面から登頂を狙ったが、最終キャンプで登攀隊長が体調を崩し、途中撤退した例がある。

1982年現在で40登を数えたと研究者は書くが、詳細を私は知らない。2003年にイタリア人Pinelliが正式許可を得て登山隊を率いてカジデー氷河に入り、西尾根ルートで1人が登頂したのが25年ぶりという。ワハーンの住人2人はフランスのシャモニで山登りの訓練を受け、2009年にフランス人ガイド2人といっしょに登頂したのがアフガニスタン国民として一番乗りであったとか、2018年アフガニスタン女性Hanifa Yousofiさんが同国女性として最初の登頂者になったなど、ノシャックは今でもネット情報に取り上げられる著名な山であるら

しい。

最後に注意事項、カジデー谷、ワハーン谷は地雷の危険が大きいことである。政府軍が必ずしも精強でなく、国内に複数の反政府勢力が盤踞するこの国では物騒な話は幾つもあるのだろうが、カジデー谷はバダフシャン州からチト랄管区に入る有力な路線が通るところだから、地雷が丹念に敷き詰められていても不思議はない。

地元の事情に明るい優秀な案内人が得られなければ、とても登山隊が活動できる場所でないことは言うまでもないことである。

文献

- 京都大学学士山岳会編『ノシャック登頂』写真66頁 本文64頁 地図 朝日新聞社 1961
- 酒戸弥二郎 岩坪五郎「ノシャック登頂」『山岳』第56年：43～62 1961
- 岩坪五郎「食料係のノシャック登頂」『JAC 関西支部報』9：1～3 1962
- 酒井敏明「ノシャック 7492m」『世界山岳地図集成』カラコルム・ヒンズークシ編 学研：260～262 1978
- 酒井敏明「ノシャックとその後」AACK Newsletter 28・29：1～4 2003
- 岩坪五郎「ノシャック登頂——三人めの男」『グローのヒマラヤ回想録』ナカニシヤ：81～85 2008
- 酒井敏明「ノシャック登頂五〇年目——ポーランドを訪ねる」AACK Newsletter 56：1～4 2010
- 深田久弥著 望月達夫ほか3氏編『ヒマラヤの高峰』4 白水社 264頁 1983
- 日本山岳会百年史編纂委員会・馬場勝嘉・渡部温子編『ヒマラヤ登山記録集成—日本人の天空に輝く軌跡 2』456頁 2008
- Boleslaw Chwascinski, The Polish Expedition to the Hindu Kush, 1960, Alpine Journal Vol.66: 235～249 1961

ポーランドの山仲間たちに幸いあれ

岩坪五郎

1960年、外国登山隊に対する許可の発行などまったく経験のないアフガニスタン王国政府は、それがどのような影響を及ぼすか考慮する

ことなく、日本隊とポーランド隊の2隊に、それを両隊に伝えることなく登山許可を出した。舞台への登場が20日ほど遅くなった

ポーランド隊は我々と異なったルートを求めたが、適当なものがなく、私たちのベースキャンプに来てしまった。当時、両隊とも隊長はBCに不在で、私たちは挨拶だけして同じ氷河谷を前進し始めた。

広瀬の体調が悪くなり、酒井と私は二人で、標高5500mにC3を作って、カジデー氷河最上部のコル標高5900mに達してパキスタン側を見下ろし、左の稜線沿いにノシャック本峰に続くと思われる国境稜線を登頂ルートとして確認、BCに下降を始めた。途中あがってくるポーランド隊に出会って挨拶、C2まであと何時間かとドイツ語で聞かれ、ツバイヤーレ（2年）と答えて笑いあった。日本を出てから英語、ウルドゥ語、ペルシャ語と変わりここでドイツ語があらわれた。

吉井さんの質問

江戸隊長はまだイシュカシムからもどっておらず、私たち二人は副隊長の吉井さんと広瀬に偵察の成果を自慢げに報告した。それを聞いてから吉井さんは、それでピッケル・アイゼン・ザイルはどうしたのと質問してきた。何の意味か私はわからず、氷河の最後のおおきな岩の上に置いてきました、といったら、大丈夫だろうか？とまた尋ねる。ポーランド人は人がいいといわれるからその心配はないと思うけれど、と付け加えた。私には質問の意味が解らなかった。私たちの登攀用具を見た他国の隊員は、黙ってそれらをクレバスに抛りこまないだろうかとの心配からの質問であった。

吉井さんは第二次世界大戦中ドイツに留学していた。世界最高の文明を誇るドイツで暮らしてきた経験からの心配であった。

我々昭和の少年には、人を見たら泥棒と思えのしつけもなかったし、下層階級の人間に悪事を働かせないようにするのは上流階級の人間の果たすべき義務であるなどとの発想は皆無であった。

あれから60年。外国に行き、いろいろ経験をしたあげく、わたしたちは幼稚で、不用心であったと思うようになった。

初登頂成功

両隊の隊長の話合いののち、酒井と私は皆から見送られ、単独で登頂に出発することに



写真1 ポーランド隊登攀隊長ビエールさんはクラクフ市在住、初登頂50年を記念して私たちが2010年8月訪れたとき、同市周辺に住むノシャック登山経験者10人余をロッジ「アキコペンション」に集めて歓迎会を開いてくれた。タトラ山地の小トレッキングにも同行・案内してくれ、感謝している。

なった。ポーランド隊からはThommenの高度計、Camping Gazのブタン・バーナーなど日本ではまだ使われていなかった最新の装備を借り、牛肉の缶詰までもらって初登頂に成功し、帰途、クレバスに横穴を掘って酒井としがみつくように体を寄せ合って、ビヴァークした。この時、「幻影の男」が現れ、彼はそのあと最終キャンプまでついてきた。二人が同じように幻影を見ているので、信頼度が高いといわれている（編集者注）。

最終キャンプで一泊し、「おかげさまで登頂成功した。このテントをポーランド隊に寄贈する」との置手紙をした。その宛先を、Comrades from Chopin's Countryとし、差出人をtwo boys from Cherry Blossom Countryとしたのが、ポーランド隊にえらく好評を得た。私たちはナチスにやられ、いまはソ連にやられて、あるのかないのかわからないポーランドの国名を使うのを避けたのである。それがえらくうれしかったらしい。ポーランド隊のベースキャンプにご招待を受けることになった。また、新しい心配が出てきた。貴君はショパンのどの曲が好きかと問われたらどうこたえるか。私の知っているのは〈子犬のワルツ〉の曲名だけだから……。幸いにしてその質問は出なかった。

ポーランド訪問

それから50年たった。ポーランド隊は、厳冬のヒマラヤ登頂で勇名をはせていた。

2010年、京大山岳部で少し年下の藤本栄之

助さんはポーランドで登山をした。その時のガイドにわたしたちの話をしたところ、「ノシヤックにおけるポーランド隊と日本隊の友情の話は有名で、自分もよく知っている」と答えたところ、藤本さんは興奮気味に連絡してきた。

私達も興奮して、ポーランド山岳会を通じて、当時の登攀隊長だったビエールさんと連絡がつき、50周年記念にポーランドを訪問しないかと仲間たちを誘った。

ダンナ夫妻、オンビキ、秋山、古川、オシメ、芳賀夫妻、贄田、オレッチ夫妻、藤本夫妻、ゴロー夫妻の15名の訪問チームが、8月23日関西空港出発、ワルシャワでは隊員のクリンスキさんに、クラクフでは登攀隊長のビエールさんに迎えられ抱擁され、私達二人はびっくりし、それを見たオンビキさんは感銘を受けたという。私達ちはハグに慣れていなかった。

8月末まで私達ちはビエールさんに案内されて、カスプロビン山に登り、スロバキアとの国境のドナイエッツ川で筏下りを楽しみ、山小屋で盛大な歓迎会をしてもらって感激して帰国した。

帰国して考える

ポーランドの人たちはどうしてあんなに親切にしてくれたのだろう。私達ちはパキスタンと合同隊（サルトロカンリ）を組んだが、あれはアユブカーン大統領と池田勇人首相の友好の一環としてであった。中国との合同隊（ナムナニ）は胡耀邦総書記の京都訪問記念のひとつとしてであった。ノシヤックは日本隊が単独で登った。個人的にもポーランド隊員たちは何も得していない。ナムナニでは第一次登頂隊員に選ばれなかった中国隊員の落胆ぶりは驚くほどだった。号泣していた。ポーナスの額だけでなく、今後の人民としての等級に影響するらしい。

街であった人たちに、ドイツ人とロシア人とどちらが好きかとたずねたらそれはむつかしい質問だと逃げられた。ドイツ人のほうが好きだが、ナチの問題があるので、逃げていると感じた。

歴史的には、16-17世紀はポーランド・リトワニア共和国としてかなり強かったが、あとフランス・ドイツ、ロシアの3国に挟まれて苦労がつづく。まずナポレオンに攻められて、そのお先棒を担いで、ロシアに攻め入り、帰りの敗戦退却では最後衛役を引き受けて、ひどい目にあう。そのあと3度にわたり分割され、つい



写真2 登頂者の一人クリンスキさんと50年ぶりの対面をしたヒンドウクシュやカラコルムに何度も出かけているヴェテラン登山家二人といっしょにワルシャワのホテルを訪ねて来て、楽しい集いになった。

に国家は消滅。第一次世界大戦の結果再現できたけれど、第二次大戦でナチスに攻め込まれ、ソ連からもやられた。カティンの森の大虐殺はヒトラーに劣らぬスターリンの暴虐である。終戦直前にはワルシャワでナチスとポーランドに決戦を挑ませ最後に参戦してソ連は勝利をもぎ取った。広島と長崎が終わってから参戦した例のやり方である。

1960年当時は登山隊に共産党の政治局員らしいのがいて、ソ連の属国のようであった。いまはかなりうまくやっているらしい。NATO(1994年加盟)でEU(2004年加盟)のメンバーでもある。軍備はアメリカ製とロシア製を入れているという。気をつけているのだ。それにアメリカ軍が駐屯しているという。いい考えだ。日本と同じだ。これならロシアからミサイルは飛んでこないだろう。

最後にもう一度、私達ちの心情をおくりたい。

Our friends, the brave climbers from Frederic Chopin's home country, thanks for everything. Good luck! Think well, be smart, and stay safe while mountain climbing.

Best,

86-88 years-old two boys from the country of cherry blossoms.

編者注：高所の幻覚

「幻影の男」についてここでは短く記されているが、岩坪五郎著「ゴローのヒマラヤ回想録」

(2008年、ナカニシヤ出版)には、「三人めの男」として以下のように詳しく述べられている。

「そのうち、妙なことに気がついた。酒井だけではない。もう一人いる。酒井の向こう側にもう一人いる。初めは幻覚だと思ったが、あまりにはっきりしているの、酒井にきいてみた。彼ももう一人いる、私の隣にいると言う。女ではないようだ。」

翌日、下山にかかるがこの「三人めの男」は、最終キャンプまでついてきた。

これと似た経験をしているのは、甲斐邦男会員である。「ヤルンカン（遠い記憶）」(Newsletter65.66 合併号、2013年7月)によれば以下の通りである。

ヤルンカン初登頂後にビバークした松田隆雄(ランプ)・上田豊(ポッポ)の救援に甲斐・森本陸世(グロン)・ニマ=ノルブの3人が向かう。必死の捜索で上田は発見できたが、松田は残念ながら行方不明であった。深夜、上田をサポートしながら4人で第Vキャンプに向かって下る途中のことである。

「下山の途中、最後尾を歩いているカイの後

ろに足音がする。こちらが止まると足音も止まる。雪稜からの雪面のトラバースでは足音が一層明瞭に聞こえる。ランプがついてきているのかと思い、振り返ったが、だれもいなかった。C Vに近づくと足音は消えてなくなった。後日、グロンに足音がついてこなかったか確認したところ、グロンも5人で降りていると思っていたらしい。共同で見た幻聴のようで、さらに後日、このようなことは実際に登頂した後にあるように聞いた。」

これらのことは、起こった時の状況を考えれば、低酸素と疲労で肉体的・精神的に限界近い状態での幻覚・幻聴ではないかと思われる。しかしどちらの場合も、それぞれ二人ずつが同じように感じているところが、不思議である。

私自身はこのような高所での幻覚・幻聴は経験がなく、また専門的知識ももちろんない。そこで、高所医学の権威のひとり、松林公蔵会員にコメントをいただいた(高所登山と幻覚、本号)。あわせてお読みください。

(編集人 横山宏太郎)

高所登山と幻覚

松林公蔵

幻覚

幻覚(げんかく、英語:hallucination)とは、医学用語の一つで、対象のない知覚、すなわち「実際には外界からの入力がない感覚を体験してしまう症状」と定義されています。幻覚の種類には、幻視(実在しないものがみえるもので、単純な要素的なものから複雑で具体的なものまで程度は様々である)、幻聴(実在しない音や声をはっきりと聞こえる)、その他、幻触・幻臭・体感幻覚・幻肢(すでに切断した足が痛む)などがあります。幻覚は脳の反応の異常錯覚でおこるもので、脳の病気である認知症などではかなり頻度が高いですが、正常人でも、過剰な心的・環境的なストレス状態でもみられます。たとえば夜間の高速道路をずっと走っている時など、刺激の少ない、感覚遮断に近い状態が継続した場合にも発生することが知られております。幻覚は思っている以上に簡単に現れます。脳が外部で起きている実際の状況を勘違い

することともいえるでしょう。そうした勘違いは、過労状態や特殊の環境ならばしばしば起きます。そのために、例えば寝不足の日々が続いていいる人などは、あるはずのないものが見えたり、変性意識に陥りやすくなります。

高山病

低酸素と疲労、過剰なストレスで脳が多大な影響をうける高所登山では、幻覚がおこりやすい環境ともいえます。

高山病は「病」とはいいますが、だいたい標高2500m以上の高所・低酸素下でおこる身体や脳の異常な「反応」とも考えられます。高山での身心的な反応は、(1)急性高山病(Acute Mountain Sickness)、(2)高所肺水腫(High Altitude Pulmonary Edema)、(3)高所性脳浮腫(High Altitude Cerebral Edema)に分類されますが、(1)急性高山病は、多かれ少なかれ誰にでもおこる反応(頭痛、食欲低下、嘔気、

疲労と虚脱感、不眠、動悸、軽労作時の息切れ、手足、顔のむくみなど)で、約50%の登山者におこると言われます。

(2) 高所肺水腫 (0.6 - 2.5%)、(3) 高所性脳浮腫 (1.8%) は、治療をしつつすみやかに下山しないと致死的になる危険な状況をいいます。

高所における人体の反応には、軽いものから重篤なものまでありますが、医学的には、下記のような症状を呈します。

「高山病の症状」

1. 初期においては、頭痛、呼吸数や脈拍数の増加
2. 食欲減退、不眠、倦怠感、下痢、嘔吐
3. 発熱、咳、呼吸困難、肺水腫
4. 幻覚、人格変化、昏睡状態、脳浮腫
5. 死亡 (通常、厳寒等の諸要素が複合して悪化する)

ノシャックやヤルンカンでの「第三の男」幻覚

ノシャックにおける岩坪ゴローさんと酒井おしめさんの場合や、ヤルンカンでの甲斐・森本グロンさんの場合も2名なので、事後に互いに話をして「誰かがもうひとりいたような変な感覚」を共有し、「第三の男」になったのではないかと思います。

1990年シシャパンマ登山でも、C1 (5850m) からABC (5640m) への帰路のできごとですが、登山に熟練した隊員 (45歳) が、日が暮れてもABCに到着せず、捜索を開始して、付近を放浪していた隊員を収容しました。登山経験豊富なその隊員に、あとで聞いてみると、「前を歩いている隊員のあとについていったら、前の隊員が急にいなくなり、道に迷ってしまった」と述べておられました。

著名な日本人登山家が高所でみた「幻覚」

世界を代表する著名な登山家・重廣恒夫さんが、幻覚の体験例を書いておられます。「1980年チョモランマ北壁に挑戦したときでした。登頂に成功したものの下山途中に夜を迎えてしまいビバークせざるを得ない状況になりました。標高約8600m、気温はマイナス30度、着の身着のままの状態でのビバーク。凍てつく寒さに体を震わせていると、ある光景が脳裏に浮かんできました。花が咲き乱れその上をチョウチョ

が舞う、春の光景が目の前に現れ、小川のせせらぎまで聞こえてくる。幻覚でした。その世界にどっぷりと浸り続けていれば、おそらくろうそくの火がふっと消えるようにして命を落としていたと思います。何とか現実に自分を引き戻すよう必死に幻覚に抵抗し、無事に朝を迎えることができました」 (<http://idee-kobe.com/blog/1864>)

さらに、これまた世界を代表する有名な登山家で植村直巳賞を受賞された山野井泰史さんも、高所での幻覚体験を記載されています。「94年にチョ・オユー (8201m) の南西壁で新ルートの単独初登に成功したときも、特殊な体験をしていますよね。ソロなのにもうひとり近くにクライマーがいるのを感じたと。たしかに人がいたような気配がしたんです。こちらがずっと深い雪をラッセルしているのに、なんで後ろの人は交代してくれないのかなと思って、しばらくして振り返ると、誰もいない。あるいは、テントを立てるときも、「反対側でポールを押さえてくれるとありがたいんだけど、なんで彼は手伝ってくれないのかな」と思ったりした。おかげで寂しさを感じなかったというものもあるんだけど、頂上近くになると消えました」 (<https://number.bunshun.jp/articles/-/247351?page=5>)

重廣さんや山野井さんの体験は、超高所からの生還者の記憶を語った貴重なものですが、高所・低酸素下での幻覚や判断力の錯誤としか考えられない有名登山家の遭難事例は多数あります。ただ、それを確かめるすべはありません。幻覚は、正常人でも過剰の身体・環境的なストレスによって経験する現象ですが、高所での幻覚・幻聴は、低酸素と疲労で肉体的・精神的に限界に近い状態での一種の高所性意識障害ともいえ、正常な認識力・判断力を失うという意味で、きわめて危険な状況と思われます。

AACKの登山医学に関する貢献

高所・低酸素下における心身の障害を医学的に明らかにして「登山者の安全を医学知識の進歩と普及によって守る」ことを目的に、1981年に「日本登山医学研究会」が発足しました。登山医学を創出したAACKの貢献は大きく、中島ダンナさん (第2回、S57年会長)、斎藤Yさん (第7回、S62年会

長)が第一世代のパイオニアでした。第23回(H14)は松林が担当し(第二世代)、登山医学研究会は、H17年に「日本登山医学会」に発展しました。第33回(H25)会長は奥宮会員が担いました(第三世代)。第一世代は卒寿を迎え、

第二世代は古希、第三世代が還暦となり、現在では第4-5世代の全国の医師・看護師会員が活躍しております。AACKからも、登山医学の第4-5世代を担う俊秀が現れることを期待しております。

図書紹介

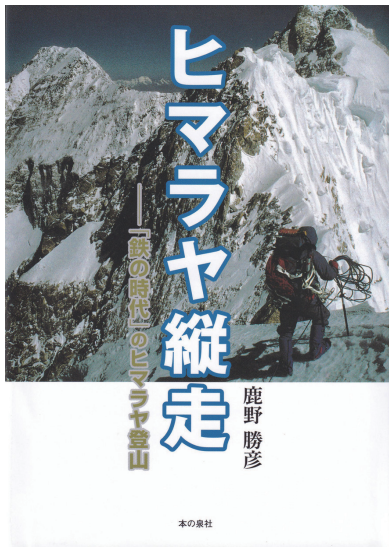
『ヒマラヤ縦走—「鉄の時代」のヒマラヤ登山』

鹿野勝彦著

本の泉社、2020年6月5日発行 425ページ

ISBN: 9784780719697 定価 3500円+税

田中二郎



本書は、発刊された直後に、東京大学大学院文化人類学研究室で親しく付き合うようになった著者から送られてきて、久しぶりにヒマラヤ遠征の本を一気に読みとおすことになったものである。

京大山岳部が1962年に現役部員が中心になって企画した初のヒマラヤ遠征『インドラサン登頂』の3年後、1965年に東大スキー山岳部(TUSAC)はカラコラムの未踏峰キンヤンキッシュに挑戦し、著者である鹿野は最年少隊員として参加した。そののち彼は、私が大学院に入学した1966年に研究生として文化人類学研究室に出入りするようになり、翌年には大学

院で机を並べるようになった。

その後鹿野は日本山岳会のエベレスト南西壁初登攀を主目的にした遠征隊に参加するなど、ヒマラヤの高峰を目指した登山に何度も出かけてきたことは聞き知っていたが、その全貌を読んだのは初めてであった。彼はネパールを中心にヒマラヤの高地民族シェルパの文化人類学研究をライフワークとするようになり、アフリカヘブッシュマン調査などに出かけてばかりいた私とは、両者が日本に帰っている間だけ親密に付き合っていた。

それぞれのヒマラヤ遠征ごとに帰国後には公式報告書が書かれ、隊員たちはそれぞれに分担執筆していると思うが、本書は6度の大規模な遠征隊の記録を、1965年のキンヤンキッシュから1984年のカンチェンジュンガ縦走まで20年におよぶヒマラヤ登山の経緯を公式報告書による行動概略を踏まえながら、当時のフィールドノートの記載と自身の記憶を頼りに一気呵成に思いのたけを綴った鹿野流ヒマラヤ登山論である。

最初のキンヤンキッシュ初登頂計画、2回目の日本山岳会チョモランマ(エベレスト)南西壁初登攀(東南稜からの登頂は果たしたが)計画は、いずれも実力不足のため、当初計画どおりには完遂できなかったが、著者はこれらの経験を若手隊員の一人として将来のヒマラヤ登山に活かしてゆくことになる。3回目の遠征は1971年東大スキー山岳部のチューレンヒマー

ル縦走となるが、このとき鹿野は登攀隊長として、登山隊の実質的なリーダー役を初めて演じることになる。この山は約2キロメートル離れた東峰、西峰からなる双耳峰で、標高はいずれも7371メートル、計画段階ではいずれも未踏峰だったのだが、出発前年の1970年の春に韓国隊が東峰に、秋には静岡大学隊が西峰に登頂してしまった。結局標高4100メートルのBCから隊を2分して西峰から東峰へ縦走するチームと東峰からこの縦走隊を収容するサポート隊を出して下山ルートを確認する計画になった。

西峰への縦走隊、東峰へのサポート隊双方共に標高6600メートルのところまで前進キャンプC5を出して頑張ったが、登山活動が50日近くに達し、体力の消耗が激しいこと、食料等の物資も限界に達し、モンスーンの襲来も近いので、頂上を目前にしながら両チームに撤退の指令を出さざるを得なくなった。しかし、この縦走計画はたまたまこの山が双耳峰で、前年度に東峰、西峰の両ピークが登頂されたからという偶然のなりゆきだったとしても、このときにヒマラヤ縦走の戦術を真剣に考えて実践する機会を得たことは、後のナンダデヴィやカンチェンジュンガの縦走につながっていったということになる。

1973年秋にはチョモランマ南西壁初登攀を目指していた社会人山岳会第2次RCCからヒマラヤ経験者として応援を頼まれ、愛知県犬山市に建設予定であった野外民族博物館リトルワールドからの現地調査と民族資料収集依頼のためのネパール滞在1年半の合間に4か月間をRCCの登山隊参加に充てることになった。これが鹿野の4回目のヒマラヤである。この隊は南西壁の初登攀に全力投球するはずであったが、登山隊の上層部はやはり世界最高峰登頂の魅力に抗いがたく、途中から一般ルートの東南稜へと力を分散させたため、南西壁の登攀は実現できなかった。

4回のヒマラヤ遠征で著者が学んだことは多かった。大学山岳部には4年間という年限があり、しかも毎年新人が入部してくるのでそのトレーニングが欠かせない。岩登り、雪壁登攀その他登山技術や能力を十分に獲得したとしても卒業して会社員になるものがほとんどだからこの力が引き継がれることができないのである。日本山岳会はより広く人材が集まってくるが、

しかし大半は大学山岳部出身者が多いから、それらの寄せ集めの感を否めない。それに比べれば社会人山岳会は個別的にはアルプスの岩壁、氷壁を経験したりして登攀技術に優れた人がたくさんいる。しかしヒマラヤの8000メートル前後の山を対象にするとすると大人数で長期間にわたる連係プレイが必要となる。チーム一丸となって連係プレイを行なうとなれば、むしろ大学山岳部の体質の方が優っている面もあるのである。

著者は日本山岳会やRCCのチームと行動を共にしたおかげで、登攀技術に優れ、しかもうまくチームワークをとって行動していけるメンバーを次つぎと見つけていくことができた。毎週のように会合を開いて、登山計画を子細に検討し、たがいに意見交換を行なって意思の疎通をはかり、全員がチームの中での各自の役割を見通せるようにしていった。さらに現地に着いてからはシェルパや高所ポーターの主だった人には詳細に登山計画を説明し、彼ら自身もある程度は自らの判断で行動できるように努力した。

ヒマラヤ縦走という本書のメインテーマは、8000メートル峰の初登頂が果たされた後での、黄金時代を過ぎたいわゆる「鉄の時代」における登山の一形態であるが、最も満足な姿で実現したのは5回目のナンダデヴィ縦走であった。6回目、最後のカンチェンジュンガ縦走では、南峰から中央峰、主峰、そして西峰(ヤルンカン)へと4峰の完全縦走を目指したのだが、結果的には西峰まで足を延ばすことができず、3峰の縦走に終わった。それでもこの縦走隊は8000メートル以上の高度で4泊5日の行動をなしとげるといふ前代未聞の快挙をなしとげ、まさしくその頑張りようは本文にもあるとおり「タブですわね」の一言に尽くされている。この縦走は3峰しか行けなかったというよりは、スケールの大きなカンチェンジュンガ4峰の縦走を目指した計画自体の方にそもそも無理があったとあってよいのではないかと思われる。

それにしても鹿野は1965年から1984年に至るずいぶん昔の記録をよくも忠実に再現して立派な本にまとめてくれたものだと感心する。「パイオニア・スピリットとオールラウンドにしてコンプリートな山行を」と称して未踏峰主義に徹していたAACKが、未踏の高峰もなく

なっている今どのような山行をしているのか私はよく知らないが、30年、40年、50年前のヒマラヤ登山の記録を、も一度振り返ってみ

るのもよいのではないだろうか。

鈴鹿山系で昨年 10 月遭難 平田和男さんの追悼集完成

編集委員会事務局・榊原雅晴



発行された「追悼 平田和男さん～ヤキハマと山の仲間たち」

2019年10月6日に三重県鈴鹿山系仙ヶ岳南尾根で遭難した AACK 会員、平田和男さん（ヤキハマ）の追悼集「追悼 平田和男さん～ヤキハマと山の仲間たち」（A5判、98ページ）が8月10日（山の日）に発行された。医師の先輩でもある斎藤惇生さん（ワイ）はじめ、28人がヤキハマさんをしのぶ文章を寄せたほか、現役山岳部時代を含む山行の様相など懐かしい写真約90枚も収められている。タブレット端末やパソコンで見ることを想定しPDF（電子ファイル）版として制作したが、紙媒体でも印刷した。どちらも希望者に配布する。

ヤキハマさんは1971年から6年間、京大山岳部に在籍した。ヤルンカン遠征をめぐる論争や、73年夏の北又谷遭難、同年11月の槍ヶ岳アイゼン合宿遭難、74年夏のK12峰遭難など、激震に見舞われた山岳部の立て直しにルームサブリーダーとして追われた。卒業後は中国・日本・ネパール1988年チョモランマ／サガルマタ友好登山隊に医師として参加、自らも7600

メートルまで登高。1990年のAACK・京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊ではシシャパンマ峰（8027メートル）のピークに立っている。心血管外科が専門で、2回のヒマラヤ登山では低酸素環境下での心機能の変化や、肥満と高度順応との関係など貴重なデータを収集、その成果は英国の医学誌ランセットにも掲載された。

追悼集では中島道郎さん（ダンナ）との「還暦医師コンビ」でシシャパンマ峰登頂を果たしたワイさんが12枚に及ぶ手書きの原稿を寄せ、「まだまだ医師として病める人たちを救える年齢だった」と、66歳での早すぎる死を悼んだ。

また共にチョモランマ隊に参加し、ヤキハマさんが三重県桑名市の平田病院を継いでからは事務長として病院経営を支えた盟友の神園泰比古さん（ゴイシ）は、一般外科病院を最先端の心臓手術が行える専門病院として再興。さらに



槍ヶ岳をバックにごきげんなヤキハマさん。これが最後の本格的登山だった（同書より）

は桑名市全体の医療水準を向上させるため、自らの病院を桑名市にそっくり寄贈するという英断を下し、老朽化した市民病院を地方独立行政法人・桑名市総合医療センターとして最新鋭の病院に生まれ変わらせた業績を紹介している。

そして病院での仕事が一段落し、大好きだった登山を本格的に再開させた矢先の事故だったことを惜んでいる。山での付き合いだけではうかがえない医療人としてのヤキハマ像が浮かび上がる。



カンパのお願い

追悼集発刊にあたり皆さんのカンパを募ります。

印刷版を希望の方は3000円（PDF版も含みます）、PDF版だけでよいという方は1000円をお願いします。

印刷費・郵送費等の実費を除いた剰余金は、現役山岳部員を支援するために設立された「京大山岳部基金」に寄付いたします。

申し込みは平田和男さん追悼集編集委員会専用メールアドレス（yakihamamemorial@gmail.com）へ。折り返し、振込先等を連絡します。

印刷版をご希望の方は名前（本名）、送付先住所を必ず明記ください。

編集委員会事務局・榊原雅晴

笹谷哲也さん追悼文寄稿のお願い

新型コロナ禍のなか、皆様お変わりございませんか。

さて、皆様ご承知の通り、本年4月21日、たいへん残念なことに、私たちの大切な友人、笹谷哲也さんが逝去されました。

つきましては、笹谷さんを偲ぶよすがとするため、皆様からの追悼文を、本年11月発行予定のAACK Newsletter 第95号に特集して掲載することになりました。

皆様にはぜひ下記の要領でご執筆いただきたく、お願い申しあげる次第です。なにとぞご協力のほどよろしく願いいたします。

原田道雄

記

掲載誌：AACK Newsletter 第95号（2020年11月発行予定）

原稿分量：任意（通常のA4判1枚弱が刷り上り1ページです）

原稿体裁：任意（単純なワープロ文書ファイル、あるいは原稿用紙もOKです）

写真：画像ファイルまたは紙焼き写真（紙焼き写真は編集終了後にお返しします）

締め切り：2020年10月16日

原稿送り先：編集人 横山宏太郎

電子メールアドレス：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp

郵送の場合は〒943-0832 上越市本町2-1-12-801 横山宏太郎

第52回雲南懇話会のお知らせ

山岸久雄

第52回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日時：2020年12月12日（土）13時00分～17時30分。
2. 場所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）
<https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/about/access.html>

3. 講演内容は検討中です。

なお、2020年5月10日に京都大学で開催予定であった第51回雲南懇話会は、新型コロナ感染拡大防止の観点から1年程度延期することとし、この旨を笹ヶ峰会メーリングリストに配信し、また、参加ご希望の皆様全員に個別にお知らせ致しました。

2020 年度総会報告と 2021 年度総会の予定について

京都大学学士山岳会 事務局長 永田龍

2020 年 5 月 23 日に一般社団法人京都大学学士山岳会 2020 年度総会が開催されました。出席者数 107 名(はがき委任状と電子参加を含む)で定足数を満たし、議案がすべて承認されたことをご報告します。

例年は総会後に「事業報告・事業計画」を印刷して、それに合わせて「会費請求書」を郵送していましたが、今年は「事業報告・計画」は総会前に会員にお配りした議案書と同一であるため、印刷配布されずにホームページでの掲載となっています。

2020 年度会費の請求書を 7 月 27 日に発送しました。会員の皆様の中には、「いきなり会費請求書が送られてきた」と思われる方がおられるかもしれませんが、上述の事情ですのでご了承ください。

来年度の AACK 総会は、2021 年 5 月 22 日(土曜日)に楽友会館 2 階講演室で開催の予定です。また 3 月の AACK 理事会は、2021 年 3 月 20 日(土曜日)に芝蘭会館別館で開催です。皆さまと直接お目にかかれる日を楽しみにしております。

会員動向

会員異動

青木俊輔 電話番号変更
有馬賢治 自宅住所変更
大村誠 勤務先所在地変更
蔵屋敷隆二 勤務先変更
佐治与志也 自宅住所変更

高尾文雄 勤務先変更
利岡徹馬 勤務先変更
中尾成邦 勤務先削除
藤澤道子 自宅住所変更
舟橋明賢 自宅住所変更
松浦祥次郎 勤務先変更
松本保博 自宅住所変更

編集後記

ノシヤック初登頂から 60 年。酒井さんには力のこもった詳しい回想記を、岩坪さんにはポーランド隊との交流などを書いていただきました。もとはといえば、総会のあとにお話しいただく予定だったものです。

田中さんにはおつき合いの深い鹿野勝彦さんの「ヒマラヤ縦走」の紹介をお願いしました。

同書は私も読みましたが、著者が、キンヤンキッシュ(1965 年)の事故の最大の理由は低酸素状態(蓄積した疲労も加わり)による注意力、判断力の低下としていることが気になりました。岩坪さんたちの幻覚体験も、低酸素と疲労蓄積の条件下です。かなり近い状況なのかもしれないと思い、松林さんに医学からのコメントをお願いしました。高所でのこのような危険を認識しておけば、少しでも安全に近づけるのではないかと思います。

COVID-19 や猛暑のなか、著者の皆様ありがとうございました。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2020 年 10 月 16 日
原稿送り先: 横山宏太郎

発行日 2020 年 8 月 31 日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町 1-8
(株)土倉事務所